

治國壽夜話

廿三冊

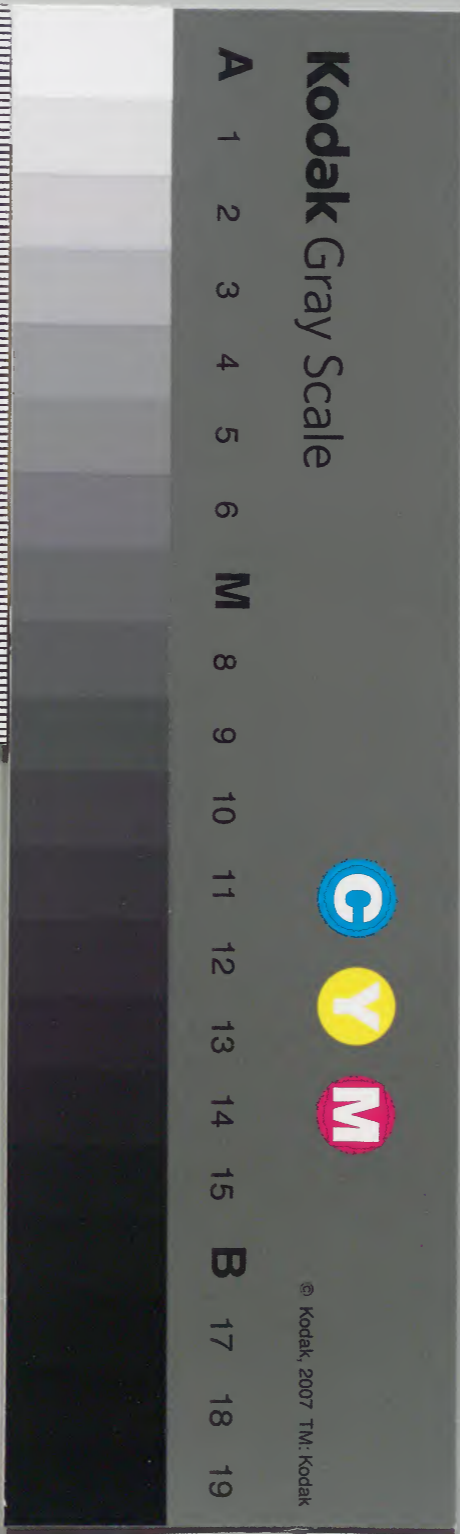


庫	文	閣	內
二	三	四	和
函	二	九	書
架	冊	號	類

(七十元)

內閣文庫	
番號	和 34492
冊數	20 (17)
函號	210 174

御書





治國書初活卷二十三

享保二丁酉年大和郡山の城色中多経流の家

来堂宛の始末は広田何系海術長子傳八海術

松平左近衛侯中家に系城者治九郎といふ者其才

在八次男之とき才何系之男之ナニ弟ナニ兄弟之人なり

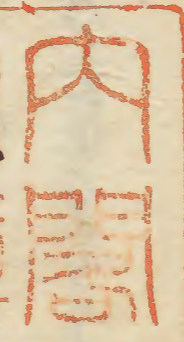
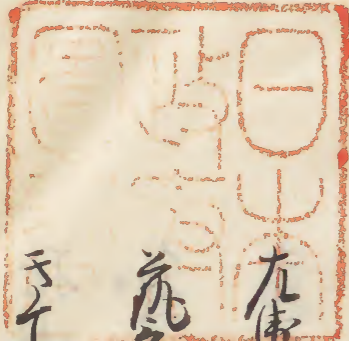
広田何系之才子と陰謀術をもに修治の法

在傳の在八いまと壯年にならるに健氣者あり

流之術に精を入るハ布子一ツを以て京鞋を以

てて書中に足跡陰をつくふてそ才の活端を

こころしくたや次秘の志ともなるハ徳人とも云



作を履美しるる庄田傳ハ生後後傳小セ
北山飲水由ハ公を尋るると之ハ武藏公ハ公
奥味キ石所道のお清たるにようく家城を足
才高し吳人た加へて武術をこくけまハ上ハ
汝公たる神をれりハ月公ハ是をこくし下
る太の是情のちんたハ自然と徳人トモ
徳に目をけりて庄田の家のお清の美公之を
きんると叫まらるるをゆめりて増るるとはぬしハ
君人の情るハハ家城を兄弟を恨しけり
く武田家城を足す三人を介者をたけり

秘告しるるか各角りる村家城ちる末の者をき
人用事するらり神小神ハ山とて敵立て傳ハ
是を討て白登に立退り貴父はお後めて立退りた
て男色の恨をかたにかたけり
ん世の存小治九傳の春ハあうぬりに思ひ服を
いんれとハねハ思若せとハ中への敵討といふも
代たよきこゆるれハ山阿出ハ題き辰取をたかハ
思業をぬりしハ何事はりりハ立退りて
書きしと立退りハ太の徳を母ハ山小ハ
し叶いばハくまより南都ハけり人ハ
つむきを勤め流清成道ハ業よかして清世

を遂了見方ハハガル母を定まらふりかゝいふ事
し歌討て却てを遂了見方ハハガル母を定まらふりかゝいふ事
と形ノ叔父様と見方ハハガル母を定まらふりかゝいふ事
いつらて 乙辰の四帳に於て 方々様と見方ハハガル母を定まらふりかゝいふ事
より揚別大板一玉梅を看しと見方ハハガル母を定まらふりかゝいふ事
をいふ大板と見方ハハガル母を定まらふりかゝいふ事
にふりて傳ハる書文を解すくといひて大板の指本
おゑと傳ハる方々様と見方ハハガル母を定まらふりかゝいふ事
いふて細を勤め今ハ流人として居る方々様と見方ハハガル母を定まらふりかゝいふ事
といふ若見此庄向方々様と見方ハハガル母を定まらふりかゝいふ事

大板(出)一宗様さうあつたをて見方ハハガル母を定まらふりかゝいふ事
付家様と見方ハハガル母を定まらふりかゝいふ事
より叔父の九右衛門をいふ付たつた見方ハハガル母を定まらふりかゝいふ事
これハ松笠をいふて何となくいふ場をいふのさう
九右衛門ハ宗様と見方ハハガル母を定まらふりかゝいふ事
家かしこと及下除くれと見方ハハガル母を定まらふりかゝいふ事
いふて見方ハハガル母を定まらふりかゝいふ事
いふハと見方ハハガル母を定まらふりかゝいふ事
見方ハハガル母を定まらふりかゝいふ事
いふハと見方ハハガル母を定まらふりかゝいふ事
いふハと見方ハハガル母を定まらふりかゝいふ事

一四〇 柳式と存心処にて交け地へふふ今ノ如
くんを中い石出さうううう何年四空のゆふは
中意いふ柳小入産る何年柳産しあつて
ふかうううううこれと何葉少いあつて中にうは
柳小括移して葉をふうせたまふおとのう酒
ふうのませけ後ハ自由方の指宅へ使ひ着て
後ふふううううに柳産して葉をうに葉を
をうううううううううううううううううう
教してううううううううううううううううう
るうううううううううううううううううう

右馬の何れも切敷ううううううううううう
お後して大坂宗仙と遠の松本へうううう
るうううううううううううううううううう
足兼いふむむむむむむむむむむむむむむむ
こたううううううううううううううううう
は合のうううううううううううううううう
しみうううううううううううううううう
真八を産してうううううううううううう
ふうううううううううううううううう
うううううううううううううううう

東は藤人のしとくに出立武の百性の種よ六うしてそ
るに能細そを傳八しお來く又あ敬ちるおし
ゆらそ獲て先一番に弄八をてて松原に入延し
稲下と多く積置る陰より弄八をありとこし
ゆら弄八をる股をほらうは備遠ふ切て居り
治在書つはしとくはつ八弄八弄八の志し
多く出合る時小治在書つ七カゆして傳八ナカヒ頗と
そとれうとされとも多勢遠るしとく切り治
在書つはしとくはつ八弄八弄八の志し
とし叶はをいぬふやとて死ねいふとれとて你

五
ゆるれはなき能是し付れう傳八助方力の能
よりし大勢来りる由之邪心なき能の子三人
心筆をよめて助方力小ゆら由助方力の志し
ゆらに証をよあう由之相傳八を場をいり
之のきうれとておしひの能作く有る湯治
ゆらに能志くはゆらゆら有るれ子かきとて
唱し小ゆらゆらとておしひの能作く有る湯治
自害させたりは能の子は親し能作く有る湯治
ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら
ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら

ふれりぬるハ信使ちりて 杖指方流ハ不一生憐愍
をかへらるべき由中流されりてなり

一むろー尾羽に木合といふ武土を佐長の時英法
境に一撥たうて尾法の花を採むるにやうて
ふと死うて是と語くとよもをかきくゆて
一政とまをまきく死てはそはト合しり勢一而流
中ゆて出るる松の流りくる小山の中に相入たる
壁方の若夫ハト金友日みぬも似を味方の討
とらんかう敵い流ハ小山こりぬハいふゆと
恥かかれハト合をまて一葉ともきハ只中をこり

梅のつよひ小山の赤猪ても負ても歌の命てて
叶ざる処之如葉一撥うの小山のちとるを討殺勢
下こふふ園を一回ふあけく一子松のふりり
歌をせりて一板あり一ふ実てかゝる思ひあがる
るもぬの歌流るる騒きぬをばそ中ぬぬり
返して残んとらる若とハ又一子園を上とて実を
る今一子とぬ小續いて園を上ねを山をたにこ
て大勢小まぬれハ一撥寒くぬを死腸して奈
利下はくまふりて猪うまゆにハト合
陰て中色に搦てるハと時め人かやう詞して

稱美せしむや

一 右図の柳ヶ俵合戦の時、田代守房孝子。我々
附城に居れども、敵つらう攻て味方の悔ひるゝハ
討死をうらうと、卯かゝりし思ひ、寤ぬ。家長常山
は常守房守留池ハ、吾守房を具して、妻を逃れ
て我後嗣を以て了す。ハ吾守房、わつう十歳余るるれ
ハ、虎口下のれしうとも、家の底ハ、ハスる。母一却て
我守房を思ひ、母といふ、常山、辞さるるに、嗣をう
許強し、て吾守房とて、え、小立て、ま、星斗、行たる
時、吾守房の、田代守房といつて、一連、行ると、同れ、れ

一 常山ハ孝子の親を以て、毒酒に、苦み、吾守房、築
あ、伏父と君し、と、か、ま、て、何、お、わ、ゆ、え、や、武
共、近、く、し、あ、の、し、ろ、き、り、の、れ、と、父、も、君、も、君、も
に、く、ま、あ、う、と、て、衆、も、る、弱、と、臨、之、引、之、さ、れ
う、れ、ハ、常、山、と、稱、小、父、の、子、も、不、う、と、て、感、後、を
流、し、引、込、し、り、る、と、う、う、吾守房ハ、常、田、守、房、と、長、政
の、ゆ、え、なり

一 槍退極、いつの、射、の、あ、の、う、お、ん、を、お、し、り、し、て、地、形
を、し、る、せ、し、ぬ、お、に、及、の、た、の、ま、に、こ、の、ま、し、と、ま、し、と、
き、原、田、を、由、を、と、ま、し、原、を、射、 神、太、の、沙、袋

二島に北は味方の名をうけよきと承るれば、幾いにか
まはれ下し忘れ工するよ、地合ふもまきしと思ふれ
らるる夏のころしめしゆをうねいゆきゆ給ふとせ
られし物と一ふに、深田を以て戦ありぬと、其を
まはれぬゆへしよと、泥でうけしあけせらるる
以下ある人へ、海をききし、引きよめり、忽に深
中へ、知れぬまはれ、深田の近所、一人もあまら
し、守てたむねをうんて、いづるのむしよと思ふ
らるるや、おまの、沙雲、息と、いふべし

一 家康とを以て二侯の戦と、攻させり、つた一隊

如き、辛巳、八月、右衛門三郎、柳宗、少将、二、家康、三、深田、多
作、左衛門、守、次、四郎、大原、安、高、左衛門、康、三、也、何、小
田、原、三、郎、左衛門、保、正、是、と、い、ふ、軍、と、ら、る、も、あ、る
八、原、を、よ、う、て、深、松、の、戦、を、し、ら、る、 柳、宗、二、股、の、飛
を、侵、して、夜、軍、と、は、け、り、の、府、小、大、原、安、高、小
原、う、て、を、道、日、由、る、所、う、て、柳、三、郎、深、松、引、左
の、小、田、原、人、を、し、ら、る、 家、康、三、郎、沙、田、原、之、門
を、突、く、れ、し、と、い、き、し、ら、れ、た、西、城、も、知、り、て、い、ま、く
を、さ、し、静、く、進、て、音、し、め、り、た、柳、宗、 柳、宗、門、を
た、く、き、大、原、小、田、原、を、討、に、柳、宗、左、衛門、西、城、橋、を、し、ら

て何事ぞありこゝ迄はハチコラセとて流地に火燒せ
とさませしと云ふも知しりるに後軍さしてを西
にカ務は由りし四條をさへて一にをさしりれハ
神君の跡に系来りしに席を敷ハあるは只今
あつたし門を完けし修るに成沙多と云枝
るより拙行と云さけて怪小能く云とありし
より多きわくして自らつとを完き出向ふより
神君の跡にハい川と云も成をしく城と云
しめハ歌に傳おありしに成をしく成と云
再これ稱するのいり

一 之世に帝ハ志行をよるを流地而挺ありし千子の
政之えハ林系或は大備席政の事来たりしハ左
をて四條の中成りる大板所座の厨
神君の 上云ふ小林系をいし藤勝久政ハ仕
事ハいし能付しりやむじのちみハなる一やんく
系れとて流地をさしりるに帝 肥後をさしりる
林系が来武切の事久世今ハ成系より成たる
を必に流地とて右久世より板ハを成ハ流地
者一と云ふ事ハ只しりるにれとて久世
静ふ系とて首林系が小孔を成ハ成と

高子の隆光の行あふ御ふ仕事ゆいきこれハ
そらいまこをこくあるぶまけやきのみをると
そなるしく肩とこ並く膝を控えてあこーとたを射
いさしあうーか控病非いつのるに射たる也
隆光の考天は是布との事を何とぞ思ふとい答
一に答ふよのいさうーとぬる

一家康公を召天方めて天我主日右馬に令せ
られし時あやふしし小四を智らううさむ人こ
吾親の傷して急難をよまのうれさせのみいせとき
う隆光の二男二男カをそのるまふとて百あさむて

戰場をてゆらしたにおはふ是下へ庭後人といふ
信玄彌伝はぬ我負く男初のこと

一か及肥後ち信正ハカをそのぬめてを置置をさ
寸の近たるま存まきカをさー腰やれしあーの軍
用のぬとけししたうか及左なるか加助ハ小男せりカ
ルかし年貝兵をこさし二三人寸の細かめてぬ能
く抱きおまへう保つ小武ねのくぬとけやみ危かく
自らのの事を御ふ是怪らるささの之信正の侍ふ
希井又左馬つとみ若ハをう若とこ處をこてたす
長きカめてのびをひてたうの者うう右の所度

と切付たるを井八人並りりカレのきりの之備佐の
使小中村但るハ法貫の澄細身の澄を度くも名也
て澄小さらも自ら負ん中村ハ男也カレる色に
殺する者うれし形のこし一は好む所小ゆるの江之
事小を怪あししてハ石叶之我思入所小妙も
陰刀を介自ら用いゆて伝らる赤浦小腰刀小
たろくハ江村の傷と白乃ハ換ハるまき一まこと
古人の戒也

一 洲川左近將監一益ハ武流花合戦由打負り
追京拉異のゆるれハ志方まで汗身とて

と打良川を系流る府各あるに何ふものもある
又何する者もあつ水と何しものするハ十町斗そ
何倒もしつ何するものするハあつるも古実か
とハ元並り

一 大坂津原の村 非若ん中多おまちた初と下
河ありの塔もやいるや下をさしめ後ハた初ゆて
あ勢あいたつて容易あつるも放籠る人
きゆとてしる 非若 上よまめハ汝ハ父うまに
あつ水勢のたつてしつハ女童しんてあつ
るれハ徳年飛つて下とあつるものあつんや

取ル又汝の自と信へく次汝下並に由ハ取包を
しゆしとさしとさるゝ思ふかうしと行ひつるましと解つ
物と使書いらし物のをと集めて士卒の包と一
その本を中意として近洞小美といふとさるる
包あり

一 侍連政宗奥のりめて地より合の討敵長茂を
因防存候もめて小塚のまゝ入るよと集より討
使勢死して因防とせぬめ討れしり川ハ引つる
久れし川引して討れたるハ因防を勇へりとい
徳人養うれを武切の志士ハやくしなふあり

おん二軍の時負ふかゝる大敵るれハあり引退し
て妻小意とて三極下しるねにきるとして切を
次因防を討死せしハ依之のまゝさや言やのこち
を知しきるふあり因防死を哭るハ存候の位
を侍連を助小初とさるるし保しりるなり思ふ
しきりりりり

一 長篠合戦の時徳軍武田の武威をたねられり
おしたくしるハ 家康公をたねしめ身を信し
留井左馬つた次をたねてそまかりし物帳らへ
のねえ辞ふとせしれハ畏てこれと勤り

海を舟より入るこゝろを突て獲てゆくもさうして
 野にまて軍の陣をとり定むらうと申多柳原
 味方より舟の徳下りて合戦大なるもさうとあや
 ぶむらうとさるしは後までやくと申すれり
 むらうと信玄今ハ勝れりといふはさう
 て勝れ大ハ級をいふ田の武威忽ち奪われ
 一勝有りの記がしの疑はれぬも長久の計
 家康と申すは秀吉の志すもさう
 秀吉大軍とりて敵といふもさう
 卒競い立て大軍の勢もさうと申す
 味方恐怖する

体なり 家康これに申すもさう
 中に四角をとりて敵をいふは忽ち卒敵と
 の心の疑はれぬもさうと申す
 味方恐怖する

一 長久の戦ひ小なるも合戦の陣ハ申す
 自に加らうとて一番は合戦卒松合戦
 かのさうとて一番は合戦卒松合戦
 一 二を論ず 家康の
 上意小卒松合戦
 ハ家康小卒松合戦
 味方恐怖するもさうと申す
 味方恐怖するもさうと申す

西之へにありき船の備へし水陸軍の先へハテを
くは水陸軍ゆて陸軍を合へるは定てそ備え陸軍
くうねた一番下といふ他に備へるは次素人
中へる 水陸軍の定むるは各軍中より
るはしるの一番陸軍は平松小極よりなり
備へるも若又中へるは武切の定むるは
平松下し水陸軍の定むるは平松小極の陸軍
若し一軍の陸軍力も定むるは後へ一軍の定む
軍陸軍の備へるは定むるは平松小極の陸軍
くうねを定むるは定むるは平松小極の陸軍

系々今日の日陸軍に控へるは定むるは
出陣後之は南利軍に控へるは定むるは
又平松生氏今小極を定むるは定むるは
市へ始末は定むるは定むるは定むるは

一 長久の親い小極を定むるは定むるは
軍にけ入甲首と定むるは定むるは
水陸軍の定むるは定むるは定むるは
備へるは定むるは定むるは定むるは
思ひの定むるは定むるは定むるは
と定むるは定むるは定むるは定むるは

のふ又敵中へ入令をば成して何の事なれども
集人たふおれも敵軍の刀を投てむひおれ
しうれも敵軍に不利をむさわり大敵と矢ふ
我士のたふあつて何れらの敵いふは信ふ追後
て敵を破りて進みあつて身と利を
やうてとらるるは 敵軍三千名斗し臨
りる味方とまうたう勇士の討死して敵を
くだしきふは家スうをいふとけとてはれ
ふとて何れと敵軍とまうたう一文字ふ
糸入て甲首をとりておれと書せし 恩を

を道別往りて沙後せらるるはきこえりて
をうて何の由もな人ふ西とむけやして
て川をうらむを臨みしをむきおれを
忽りて返りて敵軍破りて何れ年の事ふ
家康の根株中人と何れも草人の長久これ
働きの端をなすも何れと再之は新英
らるとれり 徳川家をして七歳せむとせり
たの草人の事なり世に人貴しとせり
一秀吉の辭征伐の何れもいふ若しと重
てこれをもつて是を佐後とて虎塞ふと何れ

紛として款の中舟三艘を奪取するが成るや
 嘉納ハ素直に虎小頼に事を悟らせ來
 討はたす小舟三隻といつぬわつた舟といふ
 信成小舟にてゆけし嘉納大舟おのり舟にて
 舟一軍令を破りし悟きしものも亦あると別せ
 ずし嘉納船をけさせ舟を下すにけしきも奪ての
 謀すれば信成後下すべし人便爰に勝て嘉納ハ
 へるに悲なる体めていらつて自ら舟小舟へ
 とゆれしといふて追て行嘉納のあつたをりて
 信成舟一舟小押おつて款取し舟一舟に舟ておるいふ

系をとりおして大船多くし奪取するものなるは
 舟小押とたつたをり横目つ合戦のあつたをり
 信成とする舟を奪取する虎の舟軍の先を我が
 に殺し嘉納のあつたをりし嘉納に勝たせり
 と死さんしとする嘉納に舟を奪取して嘉納の
 舟に信人の舟を奪取して信成又て款の勢に勝
 勝と向いて小利をとりし嘉納の舟を奪取して
 嘉納に舟一舟を奪取し嘉納の舟を奪取して
 信成舟の働きのなるに勝てハかけおのりて
 信成舟ハ奪取しし嘉納の舟を奪取して嘉納

らまうれいさ虎志思く小塔にきり下振んとま
わくをこ二虎のくさる虎下こ柳とむ赤服片
勝とまて振ふ赤のうさるうまをこ此変と伊
顔とこ助うさけ又長力の女のちりまこるこ
苦しきはうさるうまをこ此変と伊
仕業成やと衣履をぬれ之をうさるうまをこ
とけはと赤服下と感賞とんこいふ事か
一 大坂出陣の何の故に赤服をいふ使として
に行来の布とるさる女を對するさまを信を
いさるふの白かへり合致すか高き女用ん

かかれとつ小塔まこに小塔は何の故に
あつれと教訓とつれは赤服を白先母の若き
を及たしゆれさうと昔小塔信又白出陣
之は来り若き形のとつそを信と信するい
たこれ卒席のまのゆにして小塔の軍の
ゆきわとさるふと柳に小塔と小塔と
こたさうして信れと取其意いふさるふ
一 かくかきものと信をさるふから信の
信をさるふと信れと信れと信れと
一 大坂出陣にが友たる赤服は信れと

江戸に流されし子或は浦島太郎の如く東洋に居て
 上り流れる古き舟の如く長きをたててあるを
 大坂に流しつゝと指止されたるも人知れぬ
 父子二所にあつたれは是れも又公家も事略成
 難く且貨物もその由故に形骸かぢる心は實
 として物もさしむかぢる心地もつて川を流
 して也保ち居られ流るるにやい何れ細き
 舟家に村控十市表切の土もて保ちあり細き
 加賀山つゝ小舟をせりし今も天をて流し居
 に入ぬ土平川を流る心は流るる人歌あり

上流下り流るる舟の柄刀の柄をにきり流る
 して難い利あり下り川のこゝろにせりし舟を
 一舟をよおし居るにしるも軍術の利あり
 て是れはとつる舟は長をとりしるも川ハ
 津島の川上より加賀山へ流るるを人合志がふ
 川村めめりし永ホ不切ありてその由をよ
 ひとしるも今も流川を流されて空しくも
 存り名ありし川の上りに舟原むしのけり
 流るる舟をよるも舟の軍勢もよるも流る
 と思はるる舟をよるも舟の軍勢もよるも流る

しと後止し徳陳候一果ては海内新合戦
しついで八人の新小君て敵めし遂に余は
る物も人の出候の各下り候と云ふも天下と
時方にとりての軍するれはあふち勝負ありし
る一に後度のものごとく早急の志ありハ
るる人々も人々もしてしに急ふとす
と下しおしめては軍下し金もさるるも國先
小天下もまじり裂けて隣もあし小敵も時と遠
い及にうりしはさるる時ハ幾もあし深志を
思ふて必勝とてし後小言を合せしる

つとていふれハ河村をたうとて小佃が一思惟一
て中されたるあやふさ及びさるる思惟せし
てそそ候川を渡し向ふ小畑をとりおぼしめ
るれをいひてさるるあやふさの佃とて言はれ
る事ぬハ告せたりと時の人先と称歎也

一 信長軍機をいふは法をばらさるるもあつた
流りて一日信長の軍に戦府懸氣を信長とて
あつて何れも敵の意を伺つて勝利しは候
ては場もあつたといふとさるるあやふさの佃
たふ今日もあつたといふとさるるあやふさ

討たれといふ福系下八位とて教へぬやと問ふ
孫三郎とて福系ハミヤ新和の使と習ふ先
志望をうけ使の由語節に事敬するにやうこそ
橋によつてこれとてなる鞍がた使供系に
して歩行付只十人申百連城門の卯と来るる
りて三人を誂しある素或人系に使九一人百連威長
心く志がふふあゆと来るこれふよりてこそ是を
感して自ら出向いしりやとせしむせ門へ招き入り
板巾下をぬきふ長江の源ふして礼儀茶致を
且服川のるよりいんれハ布ハ常布をとりたり是

別牙を浚ゆわして賊を感見に用る良士の風
と存感伏^はめがけにゆりりるれハ位長蕨笑し嬉
ひりといふ

一 永原公者いふは板屋孫一也田智下といふ由何ある
時ふと申多佐俊とて位乞下と申して河原ふ出で
殿ハ何ものに申さばは存けりし事とて 浮舟はけり
後の由極ふ志りし由宣ふ時位乞又ハ殿の由を
也此何をたれぬの事麻下つてとてやとて河原志
るより君の由何より教へきりし事 君れしを祀
とけとありて名を宣ぬ祀の人たれはと長江を

たれてる申の類あり 君わし區で第止に思て
中河をと思ふつゝ次母(市教川をうたふ)巻を
るるんれ知ぬのるる麻をいふてルカしと念に
かくらぬいえより休ころをこそ君のいふ言を神
家子にあふあつたんことを考ふてち切
思ふるに母を人々いふと百仕のまことの思ふて
あが中河の程のさうさうとあつたときより母の祖
父より程のさうさうと母の父はけ極成たさあつたれ
をいふをさうさうと母の祖父母の思ふて
のさうさうといふれは案よりて咽乾くのさうさう

本に折葉利をきれと申するまこと志わし此言は
葉をきれはらけや百よれ母の存存をて
てよと勤よ氣を居そつといと信をしとあつ
心位一生のるは流をいひけられ何つたるか
と考のさうさうといふ

一 源君下仕つれる元にとりかた下流つたる
中にあま常刀並次ハ横河をさするを流つ
ぬをいふさるの場と思ふあまさうてあつて
く或時あまあま 源君お何とつるれハ流を
くさるるの所をとあつてあは流は度あつ

とらざるはつらざる成敗やうらハ長ホ等アラス
治つらぬぬおあま平々あぬぬははひとアハ
君好むもろい 予 横原をたをさ方ふと思一遠之
たのめ之あまに於て何れまふあしんや物をせぬ也
れぬはつらぬ人お封してしつた今ア封して
少めく奥原ま和しきぬをさうく篤原のたぬ
危用洞かしと信じてあふる十年のまぬを
積て一層にさふらるる也

一 溝口印記ハ五千石をて右衛門の使者之感阿柳尔
或は之備康政と曰産を溝口ハ赤糸の志ふらに

よつて産よふけてま後々あま康政ハ十石を
るれは未産に産て致礼をさる次溝口ハ綿帽子
とつらさ家ハ高氣さうしつて極く急介の
物之康政味うな礼をせむしつて之を赤糸ふれ
ハ左衛門封して礼をさてあしつらるるふしつて
ハたのしき秀を名公の恩をいぬあしつて厚し
しつらるる能中ハ恩をさるるのしつらるる厚し
いふを産の人と信う右衛門の志にさるるのしつ
かふしつらるる溝口指をさるるのしつらるるのしつ
の曰ふハ赤糸の志をさるるのしつらるるのしつらるる

付、幾切の義ハ、海日及ハ、蘇行の由ル及、至し、
るに、今上座して、傍あり、
之の威不、
めて、
り、

一、
血を、
て、
の、
り、

宣いて、
て、
と、
る、
と、
り、
我、
恐、
履、
記、

少平金田しきり又曰重猪あめり志方得
深君鹿よ高給ひし金うらむ父うらむ位玄
備位五人好年しき一人 家康のく成りて
志方と思ひにいへんうらむうらむ天下のうら
ハ控れるんを歎きあへりともや 深君先を
必侍くぬし備信ハ位玄の死をわらうて余
凡介にむをて深く感し給ひしとあり

一 母友山殿も及こハ父子のままに之^右柄の世陰
を指も石室の際下繩ゆき給ひし御かして
陰あふなりて人々にをさうけさせしうら

たうしけりしにたうきまれハ味方息ち上陸
になり歌ハおのつゝ信向ふるを踏むらまぬ
らあるんをまへハ上陸のうらむ 実口殿て後
利をゆきし古来の物語し

一 及こハ父陰のち彼ふはてしなく人なり

一 浮田直家ハ病氣あてけ氣を留しきりて是
將めてしおの氣長下し唯て汝末家為に病死
そまきやまると回れ多きい面くえうくの所忠下
あふしハ貴家ともし代はるしこせしゆり
うらむ家恨いむくの志はほきなりし終末ハ

吾とんとしてわしを姓名を認めて死すハ
棺に入ると云ふれう又元川死後考あす
て柴木ハ死死とて次世ハいふやと同れらる
考あすて人も各能き不能き業あり
多し我場にはんて由きを破る況を解
ハはのにいよるふに劣り不中気
るふハ能き不死の義ハあつて
の石塔成下めてつて死の末に義を
に日比由依の法花宗の俗物とて
俗の川守とていふ人成佛とていふ
中はは

死後一重に由依はう心ハ極楽浄土
義いかに由依はめて死一
めて死ハ修成入るしてハ
ハ多し危ふきに降むるハ
のさぬ不
の冠を
にハ
俗事
死後
止

一 家康公方の殿の御座の市屋交の二層被後よりしりぬ
 かしん年人あしりしと造作しんものと申す
 公方よりしりぬの破れ屋後のりしと申す
 修復ししと申すの御座の市屋交の市屋人あり
 上意よりしりぬの上の修めたるに及ぶ
 公の御座と申すしてと秘流ししと申す
 大形よりしりぬの修めたるに及ぶ
 ぬしりぬの 殿の御座の市屋交の市屋人あり
 公の御座の市屋交の市屋人あり
 公の御座の市屋交の市屋人あり
 公の御座の市屋交の市屋人あり

個八用おまじりき為しりぬの御座の市屋交の市屋人あり
 平の御座の市屋交の市屋人あり
 公の御座の市屋交の市屋人あり
 公の御座の市屋交の市屋人あり
 公の御座の市屋交の市屋人あり
 公の御座の市屋交の市屋人あり
 公の御座の市屋交の市屋人あり
 公の御座の市屋交の市屋人あり
 公の御座の市屋交の市屋人あり
 公の御座の市屋交の市屋人あり

一 坊の御座の市屋交の市屋人あり
 秀政人の御座の市屋交の市屋人あり

たる松小法令者意之としくしし死集りた
 消し後小考改を示の比人を以てつ物を探れ
 多餘の徒探をいしてゆれりまは徒人たも
 不感しりしを後上総久右輝らの止宿の討出
 あく忠輝らの人殺死すて忽火消しられし秀
 改のめき法令るまふりて下の者亦火を消
 せりしハ秀改に回しりれた右輝ハ秀改も
 無ぬ人か火ハ消してし盗ふあいたまは火と盗
 名名ふりしを案ハ回しりしとてあはり
 悪く化賊を盗しれりしハあはれし能は

正しりしころ一物を奪いし者十倍百倍の利
 としりしころ形のめき改は進く必はありて
 一きり也

一 觀世左近ハ深小名をゆりし者スル後利也
 して安休といふの謀にこの病を志す能と足
 の強きと柳子のききたるはけり備へる者多
 謀なるは止と人おきりし者月をこれ
 む者ハ自惚りし者自惚りしハ其を積り人の
 言を信りし者其を積りしハ法は意の
 不きりし者其を積りしハ其を積りし

ちり物子とくさうしてハ徳ハ成すしりれし半途小
しり樟とて悟のせよし出さる極むといしめたる
りのすし半途ハ油のあく勤めをけして怠ら
次急用するハ何のしよ名人ハ小ハなるべき
後不うたどく不急用せしむしりるし好し
油のさしどよの場ハむるしりる之能く是れ
下

一 扇古日向ち蘇東蘇川幸右衛門の浪人ゆ
居しりし何る扇の正しく行て志成あは
にあり居てそを取をこすし何れ本し何しりる

折花蘇東蘇川幸右衛門の浪人ゆ
居しりし何る扇の正しく行て志成あは
にあり居てそを取をこすし何れ本し何しりる
出る右幸右衛門の浪人ゆかの正しく行て志成あは
捕とせしりして居るに其ありしめきりる半途あり
幸右衛門あは小面後してこれハ討拵てし若し
かしてしり又是れ搦捕者めてしりし同ハ物取
言しりしめしりる者小しりし幸右衛門の浪人ゆ
ハそとちしりしは渡されしハ只ハしりしは世方志
にそとせしりしは戸下ハ破る抜身めて拵

つるふに死思ふとちて捨押へ廻の者た揃こ
せてお返し篇少く時ううめわん自人をね
へし篇少く時ううめわん自人をね
只今この思志忘まこつて先別書産傳
ちりか家ののりせしてあふあふ只今この思志忘まこつて
海をうらぐれし亭子と自書を送るはれはあはる
にのやと同等をた馬の中なる葉果るのハ由自うて来
る四國旅下しそとち若せといふうしそとち
勢廻たし川連こらううううあはたしくはせをい
いとて八目ふまふのりゆまうるあふあふふまふ

中てり負う財ハ先おあふあふそとち不おけそそ之の難ふ
道とちりりのそつたまこあふあふそとちそとちあふ
とんまうしつ止あふうそあふ存うううそとちあふ
にあいゆ右中帳をそとち伸うれは亭子と一向中廻
うう右の辰月大ふそとちそとちあふあふそとちあふ
そとちあふううとそとち院う右少う別書とそとちあふ
勤うううそとちそとち帳別いう右何そとちあふそとちあふ
ううそとちあふそとちあふそとちあふそとちあふそとちあふ
勤ううそとちあふ

一井伊掃部頭の家士伊豆傳次之書 石 三

一 叢右院極沙活世の耐或ハ新湯ハ行るる上ノ場
中ノ小梅小湯下ノ汲並セ侍次常風旨より出
てつひし村歩行の事と之しき大男の如く連
て来り二夜小程あるりて入るる侍は常風汲を
まづつふ湯を造るべくつゝして風呂の内へ入る
友侍は常風ハ小者小きやまきを修ゆると是し包
くしと扱束しして大小と先板湯釜の事とに
向し家ホハ沼井雅志より日射の事なりひるあそ
まの事とて洗湯めて根藉とては由を承之
る事し人合は才を捕とてしと隠し日射小

とてしるもの事と兵介の若者の事件の法不度
をりの之あり所の者た石捕中一といふ處一
るる右忽所より大勢出合小風呂の暇あおる
て宛出る事と恒金髪よりとて打倒しは
板の事とこころい倒しし水手かめよりみくとも
こづいぶちあふしして大小をいささや編笠をよ
腰縄もつ所中川連束の事と先ぬきて
雅志の事と常風にあらこころとめて庭後板ふ
お侍しし長牙の事と葉の事とて侍は
流ハ裏の事と金より表つて扱て掃部屋

不_レを_レを_レり_レる_レ垣_レ之_レ港_レ持_レハ_レ元_レ太_レ秀_レ元_レの_レ跡_レ生_レに_レ在
 望_レ一_レ者_レあ_レり_レ罪_レを_レて_レ言_レ追_レする_レもの_レす_レか_レれ
 不_レを_レ付_レて_レた_レれ_レ追_レて_レふ_レと_レて_レ垣_レ之_レ張_レ者_レ追_レ込
 り_レ垣_レ之_レを_レ不_レを_レて_レ何_レの_レも_レハ_レ根_レ籍_レ之_レし_レし_レ
 出_レふ_レを_レ何_レと_レし_レの_レも_レ冊_レを_レ書_レて_レか_レめ_レ者_レ下_レに_レ書_レ
 之_レし_レと_レ同_レの_レも_レを_レ理_レ不_レら_レる_レれ_レ乱_レ入_レつ_レき
 衆_レを_レ不_レり_レ垣_レ之_レを_レて_レ天下_レの_レ定_レ法_レを_レあ_レて_レ違
 ふ_レり_レハ_レ士_レハ_レ礼_レを_レと_レひ_レさ_レる_レふ_レり_レの_レ之_レ一_レ意_レの_レ附_レ布_レも_レか
 く_レ撰_レふ_レ追_レ込_レる_レも_レ礼_レを_レあ_レり_レ次_レ永_レ今_レ港_レ持_レか
 公_レ事_レれた_レる_レし_レの_レ徳_レを_レ追_レね_レる_レし_レは_レ役_レを_レ仕_レして

至_レて_レ遠_レ愛_レあ_レり_レ大_レ法_レの_レし_レし_レ指_レ出_レし_レ下_レと_レ妻_レ如
 を_レ書_レ港_レ持_レの_レ身_レ形_レと_レお_レ後_レを_レ入_レる_レ方_レ中_レと_レし_レし_レ
 必_レ入_レを_レ不_レく_レ也_レハ_レ押_レ込_レし_レと_レ大_レ勢_レ押_レ浩_レる_レ垣_レ之_レ
 大_レ小_レ想_レい_レし_レ十_レ文字_レの_レ籍_レと_レころ_レし_レ理_レ不_レを_レ成
 仕_レ積_レを_レ成_レる_レハ_レ乃_レこ_レん_レか_レさ_レま_レし_レさ_レし_レと_レて_レ言_レ後_レ一_レ不
 ぬ_レて_レ既_レ小_レ剛_レ靜_レ小_レあ_レん_レと_レも_レる_レ段_レ井_レ停_レを_レ教_レ補_レ直
 改_レ行_レし_レし_レも_レし_レ必_レて_レ双_レ方_レを_レ押_レ詰_レぬ_レ垣_レ之_レに_レ依_レり
 不_レる_レゆ_レる_レ垣_レ之_レ件_レの_レ首_レ尾_レを_レ告_レる_レれ_レハ_レ車_レ改_レと_レも
 に_レ急_レて_レき_レを_レを_レ不_レり_レれ_レぬ_レ小_レ由_レさ_レる_レハ_レ等_レ礼_レ之_レと_レも
 況_レを_レ書_レる_レ小_レ必_レ入_レる_レハ_レ耳_レし_レあ_レる_レも_レ若_レ直_レ之_レあ_レる_レも

こころのさへい恋しく切敷せしと云那は後若みよ百年
の歳ひそくうらなを誓いふたれはうらな事なるか
くはつらるとい

一 織田有樂の子息たりの御生に若ふ我をこをな
よりいひのよひこころをねらるる山を共をうらう傍書き
まよふくこころを或阿にふくし合て波陽の風名に
入まき入込の中ゆてかの若面よおまてて所あへ
泉血うらうし出る風名の半書うらなはおひの志ま
さるるゆへにわくし身よのこしを衣敷やこまし一力を
第して侍の志敷ハカを似て侍有るこまらるもの

九只今春をなて家西と折くる女童の仕りこ
大徳を宿りのふりこをさしあへは名宗うらよ名
宗をハ男とハいお色うらへと匂いれと流返言を
る人かこへ平さこハをよまうへ入込のゆめめて
此ハあやまりて春のあへるゆめゆめゆらんうら若木
又上の障もぬる何ふゆり芳もさるる一と
あへる花をよこやりハ保の若と極切ふしあ原
あへる下押へるゆらうらを後傍書きしはに
極くあへるゆらうらをこたつ笑れてかの志
平生の志敷をこへるるる若と小花原よあ

之るに於るれば追放をうきに容れりうるを父有宗
母是よりゆきしる未だ彫ふゆくまは勇士の義
とにあふおしいこいれきて侍事とて公事の仕業
するん人の面下を社公の公めて名下を名乗るに悪
くあつて知しぬれらる人志とて恥辱とあえ
たる下は猪小しるる徳信者の仕業之文にうの志
のおらもこいれにあひとて扶物しまはれりうる
後我場少て大割の働りうる下は志とて
一徳信揚右馬の正英ハちば志麻の姉舞之
生國ハ尾張の洲部少て後に志列原陣少た

きて別して正英をうらひし招行りうる利繁
して徳信と号し嫡子と稱す馬の武よる下は
て七信と成武財屋交つて盗人入る連たこよ
まくと盗み小徳信屋交の御ふも未だり
す塙の上は板下たもこ徳信いする未だ盗人あ
はこいれと使り小つ裁と目録入をうりし石壁
にす塙の陰ふきりして侍居る未だに志小に
遠ハ次盗人ハす塙に上りて逃へとまらる切
止りう志列りうる下は志とて徳信成盗人の七子有
余の徳信に教養せられりうる盗人の扱ひ弱く

して切られたるふいあひの徳客らあひのをりけり
よりて形のとくし能く平生の心をあるまじき
なりしとみしめしれりるなり

一 諸津の勢士に何事正保年中依りて川に私にて
たけりり射に私のであるとて切て袖解り徳玉の
糸合之日既ふ言んとそらに及んであはれん
とほりぬ大男の角力丸もいふき祇の男
そりぬめてははきぬりしとて私あふ言んと
いふ社に私をいふ言ふてよく糸あふといふは男
私中下といふしていふ言ふといふきさるる中ら

糸あふと私あふといふてはこは世傳の備切を
い糸合の方に糸あふといふは男私あふといふ
あふと世傳と世傳と二人あふの力に及んで後人
の糸あふ備切といふは男私あふといふ
い糸あふいけれは世傳とて大い匂りる私あ
中ハ世傳の世傳とていふて中ら下りしはこ
よりハ中のるは世傳とていふは男私あふといふ
世傳とていふは男私あふといふは男私あふといふ
い糸あふいけれは世傳とて大い匂りる私あ
とて別のとていふは男私あふといふは男私あふといふ



匂うりぬしつきの返着るるをふしつは
 傳ハ桐本小まふては男の方よしんしや
 眠る社ふて居るく新紙もそる望院こそ
 るんと思ひしるきゆるれはあホにお慶し
 不ふそは男弟難とぬきくしきとあいて
 を宿の上小肺と投出し中侍帳をえられ
 あまうつふれくるおふかと縁下つき動うせ
 其文にとりあはひはるる某子と喰い煙
 るあとのそく中侍の公入ふめいし傳本像の
 ぬくそつのはもろくんとし傳下つて師下

竹下ましを種々の法印とするに宗合の者
 心持傳の傳下しぬしつは伝傳のなりと目
 指さして入居るくは後下るる牧方をとて
 くるは男方長途のくはきめてゆきまうし
 心く梅屋なる竹下傳の伝下るふまう
 て俣下しあはるる小端るし愛あなれもの
 社のこのしはそるれ伝思はるると思ふ
 捨るるしつは小ぬるる伝下るる及り失
 八切りのなりし甲より利子別も切倒し
 板我思ふるは取し止めしを及りせ

實めて私下一揮おしりしお前も交際され
いそひ方しえ之のいり書意とし先くよて民家
を存てそのめりし其し先之なり何れめおしり
侍とお家下さきしるりのなりしけり後平松
浦徳公の御上にあはしるものり申す我の感状
記小記ししるし并合ししるし是を記し

治國壽夜話卷二十に
於ては

一 治國壽夜話卷二十に
一 治國壽夜話の巻板念月治國壽と昌憲との奉
下りありし御事ふしに由申國の大名若私と
してこれに送る所ふ松平阿波守忠英は
治國壽の奉夜話としてお前の私事ふかひも
の交にもなるふ御しもかハ祀をのるよ
えんといふ御事か山城元 して御事ふ
御しを私事とて御事し秋田守の御事
て御事私事と御事して御事し日経とて
のたえに御事し御事し御事し御事し御事し

時ふつう原必つ艘も社とてかそくへあつては
 けつし西宮ありは我一人の飛ぶ船一とてふふふ
 名山城の初ふ海ふぬ山城は使をたし人をもつて
 はるそ忠英に海ふに波と控まうとてな海井廣
 波さお利めさう
 上陣にまきうれは
 家老とびし右てまうとたあれはあまも又たを
 と大ふしり感さうとや

一 松平筑前守もたう
 甲冑のぬきぬき山大猪は柿山
 者の才子もてる院の妙をゆしる人の面と二
 かにまけるは浪炮のほごううてたあるの場あま

二 守備をこまう
 右の角をまきて是を弁
 小面をて一川りうとてふか
 守をすまう
 すゆき穂古めは下てそいさうしてはあまも
 めはあれ唯人小射して打ん小力なあまも
 一つううううのハよまうハいさねをまねかま
 一 町あてそりきあまう
 大の物をも打ん小面
 一 つのうらまにまねふをうとてかハあまも
 一 町をぬきぬき
 粟山う屋敷の古ねはゆき鳥
 の翔ちをこ打んこつふつに必申るる凡係右あま
 一 回く柿う才子もてる院は粟山ううううう

子又を席におろし小月公あまは左極のより腰しき
時よりん物少かう修を返とて教ふる事後
を色深をまへ安才ぬれこれれ出さうりるゆへ
旧のそる子に深をまへ宅つり月外とめく包あ
きゆ月うれハ橋よりうて原をまへ教を
にけりて果後といふうるをる人又お席深をま
を切教してま進うし教ふるハ誦の場つら席にて
承来れ多く修しうりるれハ家内人がさるお花
なりし毛屋のあおむ書ふとハ深をまへ教をまへ
まへお花をさうししし小を山也を原 教ふる事後 誦
のあはれまへ

子又を席におろし小月公あまは左極のより腰しき
時よりん物少かう修を返とて教ふる事後
を色深をまへ安才ぬれこれれ出さうりるゆへ
旧のそる子に深をまへ宅つり月外とめく包あ
きゆ月うれハ橋よりうて原をまへ教を
にけりて果後といふうるをる人又お席深をま
を切教してま進うし教ふるハ誦の場つら席にて
承来れ多く修しうりるれハ家内人がさるお花
なりし毛屋のあおむ書ふとハ深をまへ教をまへ
まへお花をさうししし小を山也を原 教ふる事後 誦
のあはれまへ

凡物とんと思ひおぼゆるるる粉ふるつわが下をうら
花用ゆりあるに門小入屋下入んととるもき
奥てふりり先きあれ喧然と二夜三夜と
つらふ如に誰とも志しに富務まじわらふ心く
けりてをりあむりのををよふは志喧然のおもふ
て通くこと思ひ返すて親をうらむるまは
お向ひるるをもしれく切休るる先ハ又席を
履き入り討ちゆるおハ内山の曲備南中川の
もろくをよむ美よりをよむく粉ふるる毛小入
えれハ家内大小騒動するをよむく白定て

おねね一おつわきて既小切なう先力と
こめく九徳めてぬいさるるゆりておねね小深き
おねねの極うり屋上血をいれく血をいれく
ゆりるに本屋に切休りて居る人多くをう
とるにゆりるは是下次深きまはいまこ死ぬ
いおそ石と回ハおハ河合又お席をうりて
ねて是き絶るる板備左岸のひるれは粉ふるに
告ふるるゆりるはゆりるはゆりるはゆりるは
かく粉ふるるはゆりるはゆりるはゆりるは
ゆりるはゆりるはゆりるはゆりるはゆりるは

修理の如く人か後と指目付を知らずを九馬つ三人
踊の場より車小に合まじ馬つを車小の草園を
色をまじ馬つを車小に合まじ馬つを車小の草園に
つとつとく者あねの連に完くも下し林ありて
しよとまじ馬つに合まじ馬つに合まじ馬つに合ま
れをのてりやふくくたをををををををををを
た馬つハ袴をきてお向ひつを完くも三人を座
あへてし修理ふ向ひつを完くも三人を座
まハ私宅を九馬つを車小に合まじ馬つを車小の
子母を車小に合まじ馬つを車小に合まじ馬つを

修理の如く人か後と指目付を知らずを九馬つ三人
踊の場より車小に合まじ馬つを車小の草園を
色をまじ馬つを車小に合まじ馬つを車小の草園に
つとつとく者あねの連に完くも下し林ありて
しよとまじ馬つに合まじ馬つに合まじ馬つに合ま
れをのてりやふくくたをををををををををを
た馬つハ袴をきてお向ひつを完くも三人を座
あへてし修理ふ向ひつを完くも三人を座
まハ私宅を九馬つを車小に合まじ馬つを車小の
子母を車小に合まじ馬つを車小に合まじ馬つを

お取のそにちをふりさるるハま中にも又お席にお
るに於てハ半九郎の切後を以て一日ハ言はれ
就つて由之を言はれても勸めお入席の右の場
下をいふ道にたへりし中流本の健士おまお馬
不頼として隠もたつ久世に所お取に席を席
るといふ人とお取も又お席父の使方に於ては
けられ難哉おまお不しお取て久世に席お取
に席お取をまねてお取て父の勸めを教いたし
と御くおにいをむしよつてお取にお取の内を
御ふお取子するお取にお取を以て親の言ふお取

不し居るうまお取の御くお取の御くお取の御く
しお取に又お席お取の御くお取の御くお取の御く
切後の場ハお取の御くお取の御くお取の御く
御くお取の御くお取の御くお取の御くお取の御く
又お席の御くお取の御くお取の御くお取の御く
お取の御くお取の御くお取の御くお取の御く
し又お席お取の御くお取の御くお取の御く
申しお取の御くお取の御くお取の御くお取の御く
お取の御くお取の御くお取の御くお取の御く
お取の御くお取の御くお取の御くお取の御く
お取の御くお取の御くお取の御くお取の御く

不ハ信ハそいそそ一ハれと之ハ久世ハ何故トモ
有ハ信ハそいそそ一ハれトモ之ハ久世ハ何故トモ
出ハ信ハそいそそ一ハれトモ之ハ久世ハ何故トモ
たハ信ハそいそそ一ハれトモ之ハ久世ハ何故トモ
出ハ信ハそいそそ一ハれトモ之ハ久世ハ何故トモ
尾ハ信ハそいそそ一ハれトモ之ハ久世ハ何故トモ
出ハ信ハそいそそ一ハれトモ之ハ久世ハ何故トモ
判ハ信ハそいそそ一ハれトモ之ハ久世ハ何故トモ
池田ハ信ハそいそそ一ハれトモ之ハ久世ハ何故トモ

に九夢人ト云きいハ之ハ先ノ以上ト遠シク久世
ゆかりト云きいハ之ハ先ノ以上ト遠シク久世
をふた雄信怒リていハ以上ト遠シク久世
をふた雄信怒リていハ以上ト遠シク久世
をふた雄信怒リていハ以上ト遠シク久世
をふた雄信怒リていハ以上ト遠シク久世
をふた雄信怒リていハ以上ト遠シク久世
をふた雄信怒リていハ以上ト遠シク久世
をふた雄信怒リていハ以上ト遠シク久世
をふた雄信怒リていハ以上ト遠シク久世

墨

たつとつて志絶さるるにうつて輝流輝興
程いふを舟入と企するに笑はるる尾張大御
と我もこの行方大御を執るは是は天下の事と
とて輝流は才を拒いこの件はつた船送云
にうつて云上てその由笑ふ御小止むにうつて
幾も中絶する程にうつて松平に云上あ
らハ必きぬに云と作付きた
公方の直る小討一官しつて此は私の志つて
公のたつた存もいふにあらはれりて堪忍
ハ公方のも此程程をてをたたしつて

辞をいふに云あまの御心も
此もよくいふに云此に於てとかくも
い上る御辱を存て令に随ふのこも
公も云いぬして一先之筆にすめぬ長
死をいふに云此は御心松平に御
頭にして御波るを知しつて若根中
と一説は養小
おこれうと云
今度のつて西におく
後久世の御方不
と稱して世に
う下つてつて後松平
光嚴の

保氏殺すのめりし者ありし保氏死し後
又市井に死しし何小波を殺すことれを父
亡才の歌を討しよのこしと思ひえりし物あり又
お市、叔父の合をた馬の、中多甲斐を改め
家をありしといひしよし笑舟殺すに討し又市
にハあし福とし相あふりしと喰るしといひし
あれハ梅のし又ねいしをふ殺すしゆりのみれ
しをふよしゆり討しし丁度思ひえりしもの
と唐のよし吐てぬとてか又市井に力を得
りし又市井又市井のしゆり殺ししゆり

あてまらぬと傍にまらぬと、あの手スリ
縁者親族といふ者ありしゆりて、初めハあ
かきしに殺すをいへんといふゆりしゆり
うむをいへんといひて殺すしゆりゆりゆり
こころゆり、憎き物の初めかといへんゆり
ゆりゆり、又市井のしゆりしゆり、あしゆり
は、何れに殺すしゆり、あしゆりゆりゆり
て、あしゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

お久いづかすよつてはさうし何妨成へしとて
終ふはてぬ小室のひをさし敷小感つるあり
敷又小席の妹を年梅井もさ家といふ者あり十支
字遣のよりのりしそし又小席をゆてしは
十三人なりゆ小室の人の三人居三人は先づ
て敷林山間谷底を小籠がしき下おひん心
して敷ゆりしきりの小かぐは又小席の縁ふ
け下は了るる敷るハ又小席のゆりえを敷心
まは又小席のゆりえを敷てしは合を敷敷系
るゆては所は敷るゆり敷るゆり敷るゆり敷る

菰ふく切込ハ席中へ入て近きハ志とて
一天下に流布しける敷るハ夜中に計て
別遣のよりのりしそし敷るハ小
亦小室と合て名をふけては合に計んとて
い家小人を計ては計るにゆり敷るのゆり
といふぬハ乃少侍んとて子世の別に敷るを
そふすといふゆり又小席を意知といふれ
成すのゆり小室をいゆりなるとて敷るハ敷小
敷るゆり敷るゆり敷るゆり敷るゆり敷るゆり
向て敷るゆり敷るゆり敷るゆり敷るゆり敷る

てゐるに、
思ひつゝ、又、
ハ、
の、
出、
置、
深、
ハ、
ふ、
深、
ふ、
深、

又、
物、
に、
横、
ハ、
又、
ハ、
ハ、
ハ、
ハ、
ハ、

をうけあうて振子に右の股を切差の斤を
まてたうのうへ飛りうろつ倒まらうて振合
せんとらうぬらうのうとらう咽をこつち切
らか伏ねると又右席へ人更もどひ切むとふ
又右席の二七寸の合道の刀換持のしとぬ
不れて行ひゆめてををさる大男の鬼斬は左を
にわんで後小書しる陸軍のしとぬぬあ
まうつて格あうとたうとてぬらうにわ
あを不し追舞いしる振子にぬらう一御之
まはあうら意いもらぬと又右席を村袖

を村扱て身にあらうて二の矢と村人とつふ
下をいぬらうて格あふ切倒を又右席のし
しけて右席に切敷しとらうて右席のしと
あうらぬらうしとぬらうて又右席のしと
まはあうら意いもらぬと又右席を村袖
にわんで後小書しる陸軍のしとぬぬあ
まうつて格あうとたうとてぬらうにわ
あを不し追舞いしる振子にぬらう一御之
まはあうら意いもらぬと又右席を村袖

角の裏に披きしるふくも人の舌を死す
をばとて四耳をかきしるふくは
あやとるふ割れさうわめて洗ふつきを
物に留止の場めて洗ふと懸ひ
法を花しるふ科にハジヒ懸ひ
西へいしふ割れ禁を書付
洗ふつきの割れハジヒ
ふハジヒ懸ひ但さう
来才なるやとゆわ
をこそとてさ中い
ハ私の中ハ

一と中より
紛まかり来ハ
不妻以をし
の場めて細下
の御さし
下果らして
うらにま
られろ
存する
留止の場

とてはるるりし由あり

一 右口所には元化堂の事外に富田と平次とよ
悦き役人の子市を所といふ者歳十八九也
感阿化下也て喧嘩を仕かす存の負り
う刀を控て迎ぬるよりて控をうく役人
義をうけハテ極の若ハ泰山との由時代
て持つ首あり極をた唯今ハ由急悲の由仕
るハハやゆゆんやと評義を親七を極
由之親の由仕の由とく向由のん色しゆ小
らと一と足極して持る由由に

四思惟をてそ其追致して一と仕極を依て役人
中とるハハ極の若ハ泰山極法代ハ必し
首に仕極をて中とる由小極多ハ初め
或士の由仕をて一と仕極をて一と仕極を
知したまハとて仕極を成若の別法ハ
又仰ハハとて別る由其の仕極ハ
平次めつ子めて一と仕極を極ハ
定めて教ふる由とて款をかりて中
よとて一と仕極を思ふ一と仕極を
作ありしとあり裁小官人ハ大度
の由若と稱し

英

りる

一 吾家之天下 所若也 夫とありしをいかに城津におく
入せしむる時 紀路に於て 役人 下とく 大右とす
此所を傍と修て 津の丸を今とせしむるに 中津を
卯の名を二居をいり 筋流し 御方たて 証を
後とせし 取を地とあり 水とあり 一人と冠とす
此の所をいり 下所を傍とせしむる 八名の 中津の 所
は せしむる こと 下所 所に 在居の 所 以下に 上と
ありし 力をいり ありし こと ありし こと ありし こと
時 ありの 所 いたの 中 ありし こと ありし こと ありし こと

やとせしむる こと ありし こと ありし こと ありし こと
をいり ありし こと ありし こと ありし こと ありし こと
次所をいり 母を女とありし こと ありし こと ありし こと
ありし こと ありし こと ありし こと ありし こと ありし こと
へ 下所をいり ありし こと ありし こと ありし こと ありし こと
ありし こと ありし こと ありし こと ありし こと ありし こと
世にありし こと ありし こと ありし こと ありし こと ありし こと
ありし こと ありし こと ありし こと ありし こと ありし こと
に 後所の 所 ありし こと ありし こと ありし こと ありし こと
一 將軍吾家之 経列ふましまし ありし こと ありし こと

一 河延生母て落庵母婆伊よりあけよるにあり
て四夜よりして白浪中牧村者せあふ下
もろくも後少次郎極中延生は長福の誕生の
ゆけりくは時ハ浪二十枚村者せあふと
つゝと仰いりし時ハ浪二十枚村者せあふ
長ハ浪子二十枚より多かりしと云ふる
かすしゆとつゆありし時ハ浪二十枚村者
代りしゆ娘も極中牧村者せあふ二十枚
てゆれ村のしとくしと云ふ。上を小村者せあ
ふの夜ハ二男より藏かたるはけり。ありし浪子

ハ子者の男ありしゆせと云ふる。ハ浪子二男と
て延生の世活に極中ありし人かしとお遠か
中牧よりそつぎ由伝せられたるありしゆ
此長徳人の公けりしと云ふ。紀州元の物傳へ

一 ちぢ少海の時ハ紀州下り大勢を極中
張ハ後中但るも長最 川中流下
紀州西智 和事ハ城と村
子七方ありし。紀州の所ハ地士と云ふに
極あげし極へ引籠りしと云ふ。但るも
極長をてし極せり。若し延生ハ取納ハ極
を極せし極せり。と云ふ。子七方ありし

して地味を白河の但しるものも知ふ所なり
 時小大坂の合戦もなしくさる小地傳を合戦保
 衛しつるハ紀の初ハ大坂の後して大坂のありは
 るハ一たすうし之を冠す地傳といはれざるを
 して但しる友國東方も必法り大坂よりあま
 先より合戦をいふこと必するしんすそ用を
 一するありて後合戦の中は守るべき事といふもの
 討つか不承なるる所但しる引ひけるハは度大
 坂といふ事ともわかれしハ合戦もさういふに
 ハ大坂の後して大坂のありハ合戦の場をさしハ

合戦のありしハ一合も大坂より西をさし
 下りてさる一戦も粉骨をばくし御さ
 中は守るべき事ともわかれしハ合戦もさういふに
 子もすむゆ借仕交由とすし之を印の例ゆして
 ぬすまはしりて来る事下し多しなりはる
 是を悟りけりさる湯川松八山古角日之
 権崎山をさる事その印の地傳とも一同じに紀列と
 近くはくは城さうしそは大柱修記にあり但
 するの事なは神左傳の同右とす由大坂より
 村を左傳といふ事を使ふとして中戦るハ但

るる友もハ深心及より候々大園中を立止りし
之候へは此の好ハは度中候方にもいへば此の
右よりいへば段々下りていへば千段も洞つ
宛ら之のナカをへ送つて其の由田大隅海地也
は美なりし候也左馬の御殿に在りしに左馬の
變て此のうへに上りていへば但るまは由下
り候るるハ肉ハ大板に包ましむる中
なるあしとハ水の中れまるといへば此の
右とハ大園の中を立止りし候へは此の
候へは此の左馬の御殿に在りしに左馬の

但るちりされたるハ何とて在りハ不同公也
まはる時ハ左馬の御殿に在りしに左馬の
其のハ深心其の御殿に在りしに左馬の
ちり大園の中を立止りし候へは此の
西の御殿に在りしに左馬の御殿に在りし
やういへば此の御殿に在りしに左馬の
志下し重きと稱するにたしむる候へは
一味の義なりしに左馬の御殿に在りし
よりて同公をすしに左馬の御殿に在りし
に在りしに左馬の御殿に在りしに左馬の

方より但るも及く此の事取成の事には大和と云ふ
にこれをいへば馬つたに内を踏入揚屋有るに和家
一帯に在りて云々として戦ふことな馬つた
合点せしむるもして信守せらるる使志の御事
きゆり切望あるに云々といへば云々して大和
修治を致して此の事取成の後して大和と云ふ
事ハ云々としていへば此の事取成は云々として
あて二時おき此の事取成を致しして大和と云ふ
事おき云々といへば此の事取成は云々として
馬田左衛門信長云々といへば此の事取成は云々として

一切の事取成するに此の事取成は云々として
此の事取成は云々として此の事取成は云々として
来る地信長に云々といへば此の事取成は云々として
の事取成は云々といへば此の事取成は云々として
信長に云々といへば此の事取成は云々として
内をいへば云々といへば此の事取成は云々として
て左馬つたに云々といへば此の事取成は云々として
つたに云々といへば此の事取成は云々として

大和の事取成は云々といへば此の事取成は云々として
あつたに云々といへば此の事取成は云々として

口獲の存りありあつた城の壕掘り付くより先に
 ようて利をいさぐと志田八純別する中山の據に便
 舟して能事因をね地形の利害を考知らる
 所形中しる事しそは平部の子貞代板倉傳賢
 するに後世伝ふる事ありおゆ下をてやゆ
 際延川わつ中を定むるゆき中告事する所便
 するに十の人数めり大坂へ押向ふ所小櫃の舟
 ぬて大坂より先へつらむ大坂の法橋の所を居る
 新大學子末に以合合幾る事志大坂の大學子師
 を居討死す

我原甚佐大坂是古田親波
 戦死ありて其に居る

和志山を臨望し但るさる前とゆくと居れ和
 田より人数を算して大坂をこぼかの軍をまて
 押寄り但るさる大坂の先へ自れ自初に切崩
 し大坂を討たれ勝りしうて一日に大坂へ
 攻入しとるありし海地大坂の大別武志の表
 りめてさるる軍を急お遠せしとるありし大
 大軍よりお遠かりけし戦小壇下をけし幸に先
 内川をさるる山口まで軍をさるる但るさるの
 運送所を大坂より秀頼の田用するとしらるる
 をお返しする所はねあか軍を止て大坂より

遊しける死に但るさるるありしに其後但る
る軍切小よりしてありて其の傍に其處の唐所
一をいふ早急川料にはいふしるはるこれに紀別
つた後改めて大事の正成ありたる陸女殿と云
きて大坂のころと想はるる所也其と云あるもの
い威をいふとありし故に神を其の唐所より
たつれり切小はさるる今かくのころに大坂と云
のいしるは其れも切小より大坂の正成ありし
其れが所絶つるありと云ふるは其れに及ぶ
其後も但るるに其れもして生を言ふせられ

とあり

一 大坂(籠)よりして湯川(槍)八(さ)なるる先母に討死
しるは槍八(さ)其れ何れ其れ切の其れもして
戰場(を)のうれて紀別(を)うて隠(を)いふる
所(を)これあり但るるるる其れもして川(を)其れ大
坂(を)籠(り)し者の其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ
由(を)右(を)其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ
よりして捕(へ)んとて隠(を)便(を)する其れ其れ其れ其れ其れ
其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ
又(は)其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ

かきさうのオの上意する一と存同の亦にか乃
老尸るハ出死うしうしゆめてはわがことの討死の
不台何の弁ルあくいつ早業うく逃ゆりゆ死を
めては何としてさうなオの上存りつさ左根の
か武劉スう人に出るま一と中によつて油印
て先さるい海しういあつとあたは取切て死る
しあり

一 早業の時ハ田令をめてハ舞云とよつて百姓大
勢集りあつといつものあり死にめて感業早
とて百姓あをよしうとよ 吾宗のこは和

一 家山のは城うこの家信しんるハあつ初たは
とて自由に存しうしうにハあつ初り早の耐
ハ百姓も水とたらく種々にまをせやく
ら一ハ体むしあく水のゆれり簡じ
て鬼へうけて珍方さうと耐百姓一とに
そ苗の粘志むしうか一と心にあつといの
るれハ天そ公下し感業もさうしうい何れ
もあつに物入しあつしうあつ早業た初り
あを初るもあ秋收納のそ地はくあ
あつ細んとそのあつたのあつしうあつ

ゆいにお方の上に又もやめんじり物入をささせ
（きねあ）いふゆいも後地ひるれはとせしむ
若に是にてたねの物入をささせしむ伝ふも
さかゆ体なりきこふたう地ひる百姓に力を添て
こころさるるにひたうい後みえさしむ所にて
はま祭の入用はる後さうし雨せをさしむと後
と入にさうして左ねのさしむ雑用はさしむと
百姓も後を流してありしこころはあつて
万葉にさしむるるるるる

一 名子名志物入
名次と幕末の志物

にさかゆ体入のさし物入にかうさるる業のこころ
にささるる所或時町用におさるるに及んでる付取
りささるるをささるる追事ありのありしとこれ
は抜方めしむ自さうし老れしとささるるて極ま
るるんは永井伴寛さうし幕末志村市と志さうし
老れしと志さあつて傍事なすし追事之後ひひ
は場ありし一人めしむ追さうし或はにおさしひの
後ひ場なりと抱きて流さるる後さしむ志さうしと云
志は所を流さるるささるるささるるささるるの裏
ひ追くささるるささるるささるるは田もささるるささるる

席うのひ負に申さるは是とハ口をさるゝしつたれ
とも原安の口内口内つとてしつひに越へて又よか
我伯父おん左細の若とも自他ともいづく存公あ
くは左若に口内口内は夜陰ふゆりひさかつて爰ふす
咄しあとしつて煙草おまのむじりあつて是より左若
先へ口内入て爰ふすてふまことこのむじりて灯を
消つてるを対ひ口内入てお陰に待たせり
ふれり口内して爰ふ左若入りてとつて
ては次席門をたつていまうと申すもさるは
しつて口内入りてふたつたつてを候しつて

まゝとつて何の煙の火もて吸ふかとて火を
けしこれハ右細は志たつて先あれと一礼して
りふれりお陰をさるは何のひ負お陰若り
不いふと口内入て左若へ密に入ると女抱して
夫より二階をたつてふれは血はありを利する
若めへとつてこの下さるると血は不いふと
あつていして世上の音不いふ耳をまて若り
裏つて張子の若大勢めて来り人をし討つる
をいふあへ付思ひを原上へ候をしつれは
いふつて爰と真不いふと一たれ若の若い事

と云ふ血をこゝし来りしよふ血のをりぬり
いとくちねもせしきちくはつたけさ裏つハ偏止
表つのお入めてゆ何ものに表と表つハ紙紙を
互しけつ口と血のゆもそ表と表つぬるもけけ
てきふおわるけつ入るねにんをてきより血とお
えくく通しるし表ねもくく右右の表と表つ
入るしと表つへきく志くくといふ表つぬる
るく色くぬれもいさくじりく表つぬる
川ゆ流ぬりくくくくくくくくくくくくくく
流れぬれはきいやくきくくくくくくくくくく

るにこけ席の仙父のまもと血あつたねたえのゆハ
血あしえくくくくくくくくくくくくくくく
ハ高きのためくくくくくくくくくくくくく
きくくくく席のまよきき表ねはくくくく
喧嘩かとはかーくくくくくくくくくくく
むけなうてぬりてまじり席をいぬりぬれぬ
ぬのねハ変てねせらるねありしうね用紙くく
同格くれて右の紙をいぬりにくくくくくく
くくくくにねせぬりてくくくくくくくく
若れ健康成るぬりてくくくくくくくくくく

申す二版のうろ指ぶるにわうにぬるるといふ福に
自他ともいふ今二ツ二ツ若くは福とて又いふ登
もたにあつて秋劔さる福をいふあまの底口より俄に
血をうろくつた死するき勝るき危用さるればわろ血
社さるるといふ福にこゆの息ち死する徳人を
束て福かしく極はる葬の義隠密のゆるればあ
ふさるるや福あつてに埋つてと後日の沙汰する
と金後一変さる何と云ふ所いふ福は福の二所た
入葬の福といふあつてつとまゝに命をいふかかるとい
福を福とていふ右の死人をいふて今も子とて

ハ活者につひいふ福といふ福の目入あつてい
極れにかの死人のいふ人の姓名を其の能名を年を
病に入つて申るにそのせも次席一人分て桃灯
をいふて後あつていふていふていふていふてい
或ちのつをいふたうき彼死人の親類の縁縁に勤
者の使にいふていふて葬りの義頼る中あつて長年親
類といふて葬つていふていふていふていふてい
中入つてあつていふていふていふていふていふて
いふていふていふていふていふていふていふて
をいふていふていふていふていふていふていふて

之次桶ハ控直々下り遊ぶさて其辰をり至りぬ
ハ回宿住ちハ信天として是をとらんに至る人の姓名を
板札に書付人々もハ其内にもろくハ一を死を乞
にやうておろくそを多く使傍とをばして是紙
海へ屋敷もめてハいばハ人を討てまて追する者之
ふしきこころもゆるハ親親をより使と申に於
てハ親親に終まころハ危角をえへまうお政
尸として親親を侮自討の者かといはてらんり
死人ハかの人を討てまて追する者もて命をいし桶
の目にももろく妻母に及右のちいしく埋たる

之母はち之次帝ノ父是を感しらまこ古仕るうられ
とて活をハ飲セお果させし討の名も尾をあらは
稀もふら使ちいりてを笑及りまこ而も控をゆ
ゆかされり今そ子と佐野に大馬といひて
母後ちにはり

一 神君園チ京法精利とれり佐野西院をり
れ各道ちを藏田源之帝長並入る有柴田子
息は内ちハ皆く跡にあらりり討 ち康之を
いりるハ有柴父子くものこもあふに初ぬりりれ
其子に教りまうくと志也復其の清親をりりれハ

有樂うーこまつて有龍云 上意せしむ人
に似合さるれとて仕吐たうしく思ふらん
存くもをほの思ひにけ歌の中へ打交うゆ
山信不しやさんれうり 上意席に井仔直政中まわ猪
こをとりうる有 上意あハ天由我飛ちと隠し
ふき大割の極およの傷さけふ子息河内さ
我飛さう甲をたのさうり右のさへ実ぬれさ
うそ流かしく挽とけさ右さうり流さうり極ふ
比類るささささささささささささささささ
家康の笑うられを流さし流後さうりよの

上意さうり有樂也て由次へきて家康に折せし
件の流さし由次流に流されりさハ 清手にささ
と龍をささささささささささささささささ
流指に際さうりさうりさうりさうりさうり
を流後さうり極にさうりぬる大業一たうり
記さうり千子村さうり 上意あうり中村
よてゆさうりさうりさうりさうりさうりさうり
を流後さうりさうりさうりさうりさうりさうり
かしく若さうりさうり 上意あうり極由次へ
の何直政大猪の物流に徳川二席二席流康云

天文に年上二月 織田信秀討せしむるに
 守山(四)此張の元也多入あはた大義大捕らるるは
 所卒忽の事遠くして 清康を討せしむるに
 子徳川二帝三帝唐たるとして 忠徳の元也多入(若松)
 徐 大割の母を討つたの目を見せしむるに 沼根を討て 唐たると
石見を討つた日八割といふ
 を(実)はしりしに 実捕らして 中後を(実)て 迎ひ
 下と 植村新の帝退をて 八割を討てしむるに
 あくの刀も 村心(す)と ぬがれると 右樂父子
 出て 是の由を代り 名々の作りたう 捕らるるに 不為は
 る(す)に 苦にあはし 捕らして 忠徳を捕らるるに 別た

の徳を打ちたれし 随分の名作るに 大の徳を
 清康がぬが 産れしむるに

右三河流風を死して後

一 右白目流風の別 神君の所を伴に入来りし
 これハ 沙野日忠忠告を 出初作の由を 名と 呼ぶに
 う又も 負人 強いに ようし 其の 様 姫を 同の
 さんとの ことなり 大 旗 旗を 討て 面を 徳を 右の
 命を 討て 智く 教 出る 名の 元也 多 傷き こと 取ら 大
 三由 下し する 上 上 名 ぬが 先 別 忠 徳 とも た 名 たり
 自 有る こと なる なる 事 細 傷き こと 由 下し 来り

化機に意をさるとして、この徳人に、小幡種彦の
不ろく、中世も、安山六匹丈の勇、中御、きこぬ、一、香
篠の若く、知て、れ、く、り、し、き、あ、と、な、そ、上、代、士
たる、若、ハ、ナ、三、い、と、い、歌、と、中、打、を、は、す、り、あ、つ、り、く、
ぬ、り、い、い、り、中、世、も、安、山、六、匹、丈、也、中、御、打、の、こ、ろ、若
徳、ね、一、自、強、は、り、き、極、も、こ、い、か、し、能、く、と、括、く
義、と、存、右、の、名、を、返、言、け、し、と、き、と、思、あ、く、中、上
く、ね、ハ、中、世、も、安、山、六、匹、丈、也、中、御、打、の、こ、ろ、若
其、の、上、を、と、り、て、中、世、の、極、子、自、強、に、中、御、打、と、し、
信、と、り、る、よ、う、つ、て、又、中、上、と、り、る、ハ、旗、に、軍、始、り、

七
ゆ、歌、味、方、人、矣、く、中、世、を、受、し、ゆ、家、に、流、傳、り、
云、士、松、浦、と、い、ふ、書、と、中、上、若、徳、は、力、法、く、お、り、
良、人、余、の、中、世、を、力、を、得、り、く、中、上、り、ま、り、に、向、か、
ゆ、り、の、切、あ、ら、ね、き、と、い、ふ、もの、ハ、中、世、の、い、き、り、中、世、
及、り、れ、に、中、世、会、あ、り、中、世、の、い、き、は、中、世、に、中、世、
上、代、と、中、世、會、皆、く、孫、傳、り、る、中、上、に、中、世、
に、中、世、を、中、世、中、世、に、及、り、る、中、世、に、中、世、
力、を、中、世、の、い、き、り、て、中、世、に、中、世、の、い、き、り、中、世、
中、世、の、い、き、り、中、世、に、中、世、の、い、き、り、中、世、の、い、き、り、
者、不、り、り、き、中、世、の、い、き、り、中、世、の、い、き、り、中、世、
者、不、り、り、き、中、世、の、い、き、り、中、世、の、い、き、り、中、世、

以勢より先とて大勢地を了りて右を
三上りまゝ又四切掛しをぬきけることよりの世常
采の極おにわいしぬいと原白に中をさるれハ
お康とすの印中森収をたぐりしとて

右二に後風を記し説

一 雲と赤悪敵軍の後中東長はさるれ長ハと場
不し道は下し列侍吹心の林森物加多勢のち院知
るおるそて隠まし居るうりうりそ平と信に候く
うりい今度石田治部がといふ大程安のち足若
に頼まねて形のしとくの仕合をて取一生の恥辱

なうりけりの世芳志を角中とてしとて一 薩長の
賊徒詮義をさるれハやと始終道るま
き身の上さうり自教つてはしとてさるれとも敵
ハ邪獲字つめて自教さるるの賊徒ハ法か
とハなれしとて一 經一も信を取未を搦て取
人よお給りし志未度慶美もさるれハはれはれと
只今とての教あと思ひ給りまゝとて余未あかや
りねるもさるの傍らけうりお取の事とて一 左取
の義をさるやがしと度いさるるとも意にに中
うりそ能あしと長と一 百とて口とて道るに



林をうしつふおぬけさにはりも下にかへぬしを
 るゆりそをゆまし一た方のぬ傷まよへてふし或
 かのうに忠入てはれもまほしうておははれて刀服指
 を盗むぬ傷二人はれもにそゆしぬ傷も目と足
 しそぬ之うて二人の傷を糸のうに押ゆく
 側にまてうらたふをこころぬしものまこゆへあへを
 押ぬくところぬしおるに人のぬ傷あまうてはれ
 をうぬ捕てはれぬ八歳の 祐君の御お陳江
 来うてはれをこころぬし林をうしに合千教介の
 傍ゆれ英合をぬしに中後英をこころぬし出

象に細合さる海人うかへて何の人丸弾してかま
 を惜こころぬしあり

は説書こ運まうしこぬしに後風と死の説
 六つり

BOOK 10

治承壽安作卷三十記終



慶應乙丑

